

1920年代初頭の上海における朝鮮人「実業家」

～玉成彬，玉觀彬を事例として～

武 井 義 和

はじめに

本論は，韓国臨時政府が樹立され，朝鮮独立運動家が多く存在していた1920年代初頭の上海に焦点を当て，先行研究では殆ど扱われてこなかった，会社・商店経営を行っていた朝鮮人独立運動家を対象とし，その「実業家」としての側面を明らかにすることを試みるが，彼らの中には活動範囲が上海にとどまらず，日本の植民地統治下に置かれていた朝鮮半島においても新聞広告で宣伝し，販売網を形成した者がいたことを明らかにする。その事例として玉成彬，玉觀彬を取り上げる。

1920年代の上海は朝鮮独立運動の拠点の1つだったため，当該期の上海における朝鮮人を考える際，「独立運動」や「独立運動家」は重要なキーワードであるが，「独立運動家」と称される人々の存在形態は一様ではない。例えば，金九のように独立運動に専念して上海在留同胞から支援を得る者もいれば，「祖国のために大きな志を抱いて上海に行った人の中には，経済問題が深刻になり，第一線をしりぞいて電車のインスペクターをしながら光復運動に尽す人もいた」というように，生活のために収入を確保しつつ独立運動に関わった者もいた⁽¹⁾。特に後者の場合，孫科志氏が朝鮮人社会の基礎的研究がなされない上海地域の独立運動に対して否定的見解を示す中で，「独立運動家だとしても，生存のための与件が準備されてこそ政治活動にも従事することができた。それで朝鮮人独立運動家たちは独立運動に従事すると同時に，職場へも通勤した」と論じるように⁽²⁾，職業を有するこ

(1) 金九『白凡逸志－金九自叙伝』253～254頁（平凡社，1973年），李康勲著・倉橋葉子訳『わが抗日独立運動史』30頁（三一書房，1987年）。

(2) 孫科志『上海韓人社会史 1910～1945』19頁（図書出版ハスル，2001年）。

とは独立運動家にとって生存するための要件であったといえる。

ところで、このような職業を有していた独立運動家を詳細にみていくと、雇用される者だけではなく、経営者として会社や商店を営んでいた者もいたことが浮かび上がってくる。彼らが会社や商店の経営に携わった理由として、2つの可能性が考えられる。1つは先に紹介した独立運動家の回想が示すように、生活の確保という問題である。しかしもう1つ、独立運動への資金提供ということも可能性として挙げられる。例えば韓鎮教という人物は、上海渡航前から排日思想を抱いており、1914年上海に渡来して海松洋行という会社を営んでいたが、韓国臨時政府樹立後は資金提供という形で臨時政府を陰から支えたとされる。また、彼は臨時議政院議員や時事策進会(後述)の会員などという形でも独立運動に関わっている⁽³⁾。

ただ、経営に携わっていたすべての人にこの2つの可能性が必ず同時に当てはまるとは限らないし、またこれらの点については史料上の制約から傍証の範疇で述べることしかできない部分が多い。したがって本論はこうした点について探ることを直接的な課題としない。むしろ、彼らの中には本論で述べるように、上海という限定的な都市の枠を超えて朝鮮半島においても新聞に広告を掲載し、商品販売網を形成して事業を展開しようとした者もいたのであり、したがって経営者の側面をも有する独立運動家が、具体的にどのような経済的活動を行なったかという実態を明らかにすることを目的とする。従来、こうした独立運動家の経済的活動について取り上げられることは非常に少なかった。わずかに、孫科志氏がこれに該当する朝鮮人について、いくつかの事例を挙げている程度であり、それも上海で会社・商店を営んだ彼らが独立運動を支援したという指摘にとどまっている⁽⁴⁾。

(3) 「大正七年五月三十一日調 朝鮮人概況 第二」(外務省記録『朝鮮人ノ海外移住並移住者ノ取調一件』6),「重ナル排日派朝鮮人略歴(第二輯) 上海総領事館 大正九年五月調査」(外務省記録『不逞団関係雑件 朝鮮人ノ部 在上海地方』3),『外務省警察史』46巻,142頁,144頁,224頁(不二出版,2001年)。

(4) 孫科志「上海韓人社会性質の変遷」136~137頁(复旦大学韓国研究中心,大韓民国臨時政府旧址管理处編『二十七年血与火的戦闘:紀念韓国臨時政府成立80周年論文集』,人民教育出版社,1998年)では、上海在住の一般の朝鮮人も経済的に独立運動を支援したと論じられており、数名の人物とその支援内容が挙げられているが、韓鎮教もその中に含まれている。しかし彼を一般の朝鮮人と単純に捉えられるのかについては検討を要すると思われる。

そのため、本論ではそうした先行研究の欠落を埋める意味合いも込めて玉成彬、玉観彬を取り上げ、外務省記録や『東亜日報』などを主な資料として用い、冒頭で掲げたように事業の実態を明らかにすることを試みる。付言すれば、その作業は今まで明らかにされてこなかった点の解明とともに、外村大氏が指摘するような、現在の国境の枠組みを超えた朝鮮人の活動という問題意識につながるものと考ええる。もっとも、その指摘は戦前の在日朝鮮人についての研究の中で、日本と朝鮮半島との間の朝鮮人の移動に関して言及されたものだが⁽⁵⁾、本論も上海という都市の中で自己完結的に捉えるのではなく、朝鮮半島とのつながりを視野に含めることで、国境を越えた朝鮮人の経済的活動の側面を主に捉えようとするものである。

予め注意点を述べると、経済的観点で明らかにされるべき商品の販売量や売上高については、史料が確認できないため扱うことが困難である。そのため、本論は限定的な部分しか論じることができないという限界を内包していることも、合わせて申し上げておく。

凡例)

- ①本論の引用史料および注では「鮮人」、「支那」などの語が出てくるが、原文のままとした。また、本論では「京城」（現ソウル）などの植民地時代の地名を使用した。
- ②漢字は原則として当用漢字で表記した。
- ③年号は原則として西暦で表記した。
- ④新聞記事の年月日を示す場合、例えば1921年4月2日を21/4/2という形で簡略化した。

1. 玉成彬、玉観彬の経歴

まず、玉成彬、玉観彬の経歴と独立運動家としての活動について、外務省記録を主な手掛かりとしてみていくことにする。この両者はいとこ同士

(5) 外村大『在日朝鮮人社会の歴史学的研究 - 形成・構造・変容 -』59頁（緑蔭書房、2004年）。

の関係で、原籍はともに朝鮮北部の平安南道中和郡である⁽⁶⁾。

玉成彬は1885年に誕生し、上海渡航以前の状況は不明だが、韓国臨時政府成立直後の1919年4月21日と25日に、臨時政府議政院議員として名がみえる。同年12月末には大韓赤十字会常議員に就任、1923年には僑民団議員に当選している。しかし、1924年1月、独立運動家に爆弾を供与した罪で上海日本総領事館に捕捉され、長崎地方裁判所に護送されている。その後の法的処分は明らかでないが、彼は再び上海に戻り、1930年安昌浩が組織したとされる韓国国民党の立ち上げに関わったようである。1933年時点でフランス租界の刑事であったことが確認できるが、それ以後の消息は不明である⁽⁷⁾。

一方、玉観彬の経歴は上海渡航前の段階から確認することができる。彼は「平壤ノモノ」という記録があり、大成学校を卒業し新民会の会員になったとあるから⁽⁸⁾、原籍は平安南道中和郡であるが、実際は平壤で生まれ育ったと考えた方が妥当であろう。新民会は独立運動家の安昌浩が同志たちを得て1907年に設立した団体で、目的の1つに教育機関を設置して青少年の教育を振興するというものがあった。それに沿う形で、民族運動の人材や国民教育の師を養成することを目指して、同年平壤に設立されたのが大成学校である。安昌浩は同校で精神教育を自ら担当したが、韓国併合（1910年）の直前に亡命という形で朝鮮を離れざるを得なかった⁽⁹⁾。大成学校で学んだ玉が民族意識に触れ、学校の経営母体である新民会の会員に加わったとしても不思議なことではない。しかしその後、寺内総督の暗殺未遂事件に加担したとして検挙される⁽¹⁰⁾。これは朝鮮総督府が新民会を弾

(6) 朝鮮総督府警務局「大正十一年九月 在上海要注意鮮人連名簿」（外務省記録『不逞団関係雑件 朝鮮人ノ部 在外要注意朝鮮人連名簿』）、「上海仮政府並ニ義烈団其他不逞鮮人ノ状況ニ関スル件」（1924年1月28日）の玉成彬の項目。なお、そこでは玉観彬を「玉寛彬」と記載している（外務省記録『不逞団関係雑件 朝鮮人ノ部 在上海地方』5）。

(7) 『外務省警察史』43巻、265頁、267頁（不二出版、2000年）、『外務省警察史』45巻、51～52頁、236頁（不二出版、2000年）、前掲『外務省警察史』46巻、22頁、162頁、231頁。

(8) 前掲「重ナル排日派鮮人略歴（第二輯） 上海総領事館 大正九年五月調査」。

(9) 李光洙著、具末謙訳『至誠、天を動かす』186～188頁、215頁、303～304頁。なお、新民会の他の目的としては、国民に民族意識と独立思想を鼓舞する、同志を見出し団結して国民運動のための力量を蓄積する、各種商工業機関を作り団体の財政と国民の富力を増進すること、などが挙げられる（同書186～187頁）。

圧するため、併合から2ヵ月ほど経った1910年12月に寺内正毅朝鮮総督が平安道を視察したとき暗殺陰謀があったとでっち上げ、1911年9月から600名余りを検挙、1912年3月に128名を起訴した事件を指す。京城地方法院での第1次公判で105名に刑が宣告されたため、「百五人事件」と称される。玉は第1次公判で他の17名とともに7年の刑、1913年7月の第2次判決で他の4名とともに5年の刑が宣告されたが、1915年2月特赦で釈放された⁽¹¹⁾。

釈放後は鎮南浦で商業を営んだり銀行員を務めたようだが、三一運動直後の1919年11月上海に渡航する⁽¹²⁾。以後、同地で独立運動に関わっていくことになる。すなわち、1919年12月末時点では国民教育の研究、留学生派遣の奨励および指導を目的とした大韓教育会の中心人物に名を連ね、1920年2月時点で韓国臨時政府の機関の1つであった赤十字会幹事（これは玉成彬が常議員を務めた大韓赤十字会と同一と思われる）を務める。1922年7月頃には時事策進会のメンバーに加わっている。この会はさまざまな問題のために独立運動に関わる各方面が偏見を固執し、時事が紛糾することで独立運動が中止状態に陥ったことを憤慨する同志たちが会合して、各方面の主張利益を十分に討議し最善策を決定して実現することを目的としたものである。1923年には僑民団議員に当選している（翌年4月議員免職）。そして時が下った1933年8月1日、フランス租界で「日本官憲ノ走狗ナリ」という理由で独立運動家により暗殺された⁽¹³⁾。

このようにみえてみると、両者は韓国臨時政府が成立した1919年に上海に渡航しており、非常に早い段階から独立運動に関与したことが分かる。ただし、玉成彬の場合は1920年代半ば以降の独立運動家としての活動が外務

(10) 前掲「重ナル排日派鮮人略歴（第二輯） 上海総領事館 大正九年五月調査」、高警第1973号（1924年6月9日）「在上海朝鮮人玉成彬ノ言動ニ関スル件」（外務省記録『不逞凶閥係件 朝鮮人ノ部 在上海地方』5）。

(11) 姜在彦『朝鮮近代史』180～181頁（平凡社、1986年）。なお、外務省記録では検挙された玉成彬について、「被告トシテ起訴サレタルモ証拠不十分ニテ免訴トナリ…」（前掲「重ナル排日派鮮人略歴（第二輯） 上海総領事館 大正九年五月調査」）、または「明治四十五年夏尹致昊一派ノ総督暗殺陰謀事件ニ干与シ京城地方法院ニ於テ懲役六年ニ処セラレ大正四年二月特赦ニ依リ出獄…」（前掲「在上海朝鮮人玉成彬ノ言動ニ関スル件」）と記録されている。

(12) 前掲「在上海朝鮮人玉成彬ノ言動ニ関スル件」。

(13) 『外務省警察史』44巻、51頁（不二出版、2000年）、前掲『外務省警察史』46巻、18頁、162～163頁、224頁、231頁、234頁。

省記録から浮かび上がらないため、詳細は分からない。

では、彼らはここまでみてきたような形で独立運動に関与しつつ、いつ頃から会社経営に携わるようになったのか、その規模はどれくらいのものであったのか、などについて次章で検討していく。

2. 玉成彬, 玉観彬の会社経営

①麗徳洋行と倍達公司

玉成彬, 玉観彬が起業した時期については直接的な資料が限られているため, 朝鮮語新聞『東亜日報』の広告欄から探っていくことにする。

三一運動により, 「武断政治」から制限付きながらも言論, 出版, 集会の自由などが認められるようになった「文化政治」へ植民地統治が転換した1920年, 朝鮮総督府が民族主義者の李相協に発行権を与えて誕生した『東亜日報』は⁽¹⁴⁾, その広告欄に朝鮮国内のみならず, 上海在住朝鮮人が経営する会社・商店の広告も掲載していた。しかし, 1920年時点では上海在住朝鮮人の広告が見当たらず, したがって玉成彬や玉観彬の会社名も登場しない。初めて現れるのは1921年4月2日からであり, 麗徳洋行という社名であった。経営者は総経理として玉成彬と玉観彬がともに名を連ねている。また, オンクル(영글)という外国人も総経理として名がある⁽¹⁵⁾。ここから, 玉成彬と玉観彬は共同経営で事業にあたっていたこと, そして少なくとも1921年4月には会社が設立されていたことが分かる。外務省記録には玉観彬について「大正十年二月仮政府(注: 韓国臨時政府)方面ヲ辞シ藥種業ヲ始メ」たとあるが⁽¹⁶⁾, この点を踏まえて考えると, 1921年2月に麗徳洋行が設立されたという推測も成り立つ。

しかし, 後に共同経営は解消されたようで, 玉観彬は別に倍達公司という会社を興している。すなわち, 1921年9月11日と9月18日の麗徳洋行広告では総経理として2人の姓名があったが, 同年10月21日に初めて倍達公司の社名と, 経理として玉観彬の名が登場する。ちなみに, 10月27日から

(14) 前掲『朝鮮近代史』205頁。

(15) 『東亜日報』21/4/2。

(16) 前掲「在上海朝鮮人玉観彬ノ言動ニ関スル件」。

彼の肩書きは総経理となっている。玉観彬は12月4日、12月11日、12月18日と3週にわたって「玉観彬声明」を掲載し、麗徳洋行の総経理を辞職して合名会社倍達公司を設立したことを述べている⁽¹⁷⁾。しかしながら、倍達公司が発行していた『上海倍達商報』第1号(22/3/1)に掲載された「玉観彬声明」では、彼が1921年8月1日に麗徳洋行を辞職したことや、「債権債務を清算終了したので自今以後は麗徳洋行と自分とは商業上何ら関係がない」という趣旨を表明している⁽¹⁸⁾。仮に8月1日に辞職したとすれば、9月に『東亜日報』に掲載された麗徳洋行広告の総経理連名をどう解釈すべきなのだろうか。そもそも、なぜ共同経営が解消されたのだろうか。ただ、1921年8月または9月に麗徳洋行から分離する形で倍達公司が誕生したことは確かである。

ちなみに、これらの会社のその後についても簡単に触れておく。麗徳洋行については筆者が調査した1922年末までの『東亜日報』において、同年2月まで広告が確認できる。それ以降は不明だが、1924年の記録には玉成彬について「昨年当地「エグス」会社ヲ辞職シ…」⁽¹⁹⁾と記されていることから、麗徳洋行を廃業し、別の会社に社員として勤務した様子が浮かび上がる。もっとも、後述するように1922年12月の外務省記録に玉成彬の姓名と麗徳洋行の社名がみえるため、少なくともその頃までは麗徳洋行を経営していたことになる。

一方、玉観彬は1924年新たに三徳洋行という会社を立ち上げている。当初は輸出入商として出発したようだが、1929年時点では薬種商を営んでいたことが確認できる。三徳洋行は中国人にも広く知られていたようで、『上海商業名録 第四次増訂』（商務印書館、1925年）に社名が記載されている。同社は上記のように1929年時点でもその存在が確認できることから、玉観彬によって比較的長く経営されたことが分かる。⁽²⁰⁾

(17) 『東亜日報』21/12/4, 21/12/11, 21/12/18。

(18) 『上海倍達商報』第1号(22/3/1), 『上海独立新聞』（韓国学資料院発行、2004年、影印版）所収。

(19) 前掲「上海仮政府並ニ義烈団其他不逞朝鮮人ノ状況ニ関スル件」。

(20) 前掲「在上海朝鮮人玉観彬ノ言動ニ関スル件」、商第188号(1924年5月22日)「在上海朝鮮人商業者ノ件」(外務省記録「不逞団関係雑件 朝鮮人ノ部 在上海地方」5), 機密第617号(1929年5月25日)「上海高麗商業會議所設置ニ関スル件」(外務省記録「在外邦人商業(商工)會議所関係雑件」1), 『上海商業名録 第四次増訂』84頁(商務印書館、1925年)。

②麗徳洋行と倍達公司の取扱商品、規模

ここではまず、それぞれの会社の取扱商品を『東亜日報』掲載の広告から明らかにしてみたい。表1 A)・B)は、1921年から1922年にかけての広告をまとめたものである。A)からは、麗徳洋行の主な取扱商品がドイツ製やイギリス製の医薬品であったことが分かる。例えばドイツ製医薬品の場合、種類が多岐にわたるが、比較的に繰り返し掲載されていた主なものは、淋病や梅毒といった性病の治療薬（六〇六淋薬、独逸六〇六、内服六〇六清毒丸、独逸洗淋薬）、咳や痰の治療薬（万応治咳丸）、胃腸の薬（独逸胃健丸）、関節リュウマチ・腰痛・頭痛・坐骨神経痛・発寒熱・百日咳・流行性感冒に対する薬（独逸万霊薬）、下痢や一切の急性胃腸病に対する薬（独逸護腸丸）、生殖機能や胎児に効果あると宣伝されていた薬（独逸殖民丸）などが挙げられる⁽²¹⁾。一方、イギリス製医薬品の場合は「韋廉士大醫生紅色補丸」（Dr. Williams' Pink Pills For Pale People）という1種類のための広告である。効能の紹介は広告により異なる部分があるが、主に神経衰弱や虚弱、貧血症、腰痛、脚気などを治す旨宣伝されている⁽²²⁾。

そして1921年6月3日の広告には「麗徳洋行薬材部」という部署名が登場しており、以後は同名で広告が出されていることから、専門的に扱う部署が社内に設けられ、医薬品はその部署がもっぱら担当していった様子が窺える。一方、他の商品はどうだったのかについても確認しておきたい。1921年9月11日と9月18日には絹織物の広告が登場しているが、中国の蘇州、杭州、鎮江にあるそれぞれの大絹織物工場と特約したと宣伝している。その関係からか、潘法常という中国人経理も名を連ねるが⁽²³⁾、広告はこの2回しか確認できなかったことから、こちらは振るわなかったのではないかと推察される。ただし、麗徳洋行薬材部名義のドイツ製医薬品広告では10月28日以降、注意点の1つとして絹織物および雑貨の注文は必ず先金を要することが挙げられていることから、これらの品々もこの時期以降には扱うようになったことが窺える。しかも倍達公司誕生後に現れたのが興味

(21) 『東亜日報』21/4/2, 21/4/6, 21/5/22, 21/6/3, 21/8/5, 21/10/28など。

(22) 同上21/5/6, 21/5/20など。

(23) 同上21/9/11, 21/9/18。

1920年代初頭の上海における朝鮮人「実業家」

表1. 『東亜日報』広告における麗徳洋行, 倍達公司の取扱商品(1921～1922年)

A) 麗徳洋行

社名	取扱商品	広告掲載日	備考
麗徳洋行	ドイツ製医薬品	21/4/2, 21/4/6, 21/4/13, 21/4/18, 21/4/27, 21/5/2, 21/5/16, 21/5/22, 21/5/29, 21/6/5	
	イギリス製医薬品	21/4/25, 21/4/29, 21/5/3, 21/5/6, 21/5/20, 21/6/4, 21/6/12, 21/6/20	
	「上海麗徳商報」	21/4/28	中国の薬材, 絹織物の貿易の開始広告, 漢薬代理店募集の広告。
	絹織物	21/9/11, 21/9/18	
麗徳洋行 薬材部	ドイツ製医薬品	21/6/13, 21/6/21, 21/6/28, 21/7/4, 21/7/14, 21/7/22, 21/7/29, 21/8/5, 21/8/13, 21/8/16, 21/8/27, 21/10/28, 21/11/8, 21/12/29, 22/1/18, 22/1/31, 22/2/11	21/10/28, 21/11/8, 21/12/29, 22/1/18, 22/1/31, 22/2/11の広告は漢方薬「広東六味丸」も含む。
	イギリス製医薬品	21/6/22, 21/6/28, 21/7/11, 21/7/16, 21/7/24, 21/8/2, 21/8/5, 21/8/16, 21/8/21, 21/8/28, 21/9/3, 21/9/9, 21/9/17, 21/9/24, 21/11/5, 21/11/13, 21/11/19, 21/11/26, 21/12/2, 21/12/9, 21/12/17, 21/12/24, 22/1/9, 22/1/17, 22/1/21, 22/1/28, 22/2/1, 22/2/8, 22/2/18	
	「エム・エム・ティ・コルボット博士の無料神方」	21/12/12, 21/12/21, 22/1/12, 22/1/24, 22/2/6, 22/2/21	

出典：『東亜日報』1921～1922年の広告欄より作成。

注：筆者が広告欄をもとに、表に編集し直した。

深い⁽²⁴⁾。

さて、「エム・エム・ティ・コルボット博士の無料神方」という広告もしばしば掲載されていたことに気付く。これはドイツの医学博士でアメリカ赤十字会顧問として上海に来たコルボット（콜보트）が、麗徳洋行と交渉の結果無料処方をするようになったので、病録表に記入して送付すれば処方して霊薬を進呈するという趣旨である⁽²⁵⁾。だが、無料で薬を処方して

(24) 『東亜日報』21/10/28, 21/11/8, 21/12/29, 22/1/18, 22/1/31, 22/2/11。

(25) 同上21/12/12など。

B) 倍達公司

社名	取扱商品	広告掲載日	備考
倍達公司	ドイツ製医薬品	21/10/21, 21/10/27, 21/11/10, 21/11/17, 21/11/25, 21/12/1, 21/12/8, 21/12/16, 22/5/1, 22/5/19, 22/6/1, 22/6/7	21/12/8の広告はドイツ製補聴器も含む。また、22/6/7は朝鮮総代理店の玉田洋行設置案内も併記。
	ドイツ製医薬品と漢方薬	22/7/1	玉田洋行と連名。
	「上海倍達新聞」	21/12/23, 21/12/30, 22/1/19, 22/1/25, 22/1/29, 22/2/6, 22/2/12, 22/2/19	ドイツ貿易勧誘、倍達公司へ委託輸入の案内。22/1/19より倍達公司の朝鮮総経理部・鉄東洋行も連名。
	ドイツ紙幣と補聴器	22/7/3	玉田洋行と連名。
	ドイツ紙幣	22/8/13, 22/8/20, 22/9/8, 22/9/13	玉田洋行、取次販売店と連名。
	補聴器	22/7/8	
	ドイツ製医薬品、ドイツ製ズボン機械、補聴器、ドイツ紙幣交換	22/10/15	玉田洋行と連名。

出典：『東亜日報』1921～1922年の広告欄より作成。

注：筆者が広告欄をもとに、表に編集し直した。

申請者に送付することの現実性に疑問を抱かざるを得ない。むしろ、これは自社の存在のアピールと理解すべきであろう。

一方、B) としてまとめた倍達公司の場合、広告が登場するのは1921年10月からとなるが、麗徳洋行よりも取扱商品が分散している傾向が読み取れる。最も多く宣伝されている商品はドイツ製医薬品で、主なものを挙げると、性病の治療薬（独逸淋疾聖薬・独逸淋疾断根聖薬）、痔の薬（独逸痔疾薬）、肺結核や長く続く咳の治療薬（独逸補肺聖薬）、婦人病の薬（胎養調経白鳳丸・独逸婦人薬）、胎教・胃健・消化不良など一切の症状に効くという薬（独逸鉄血汁・独逸補薬鉄血汁）などがある⁽²⁶⁾。種類が多いという点では、麗徳洋行と同じである。しかしそれ以外に目を引くのは「ドイツ紙幣」である。これは倍達公司が朝鮮総代理店として京城に設置した

(26) 『東亜日報』21/10/27, 21/12/8, 22/5/1 など。

玉田洋行、およびその取次販売店（後述）との連名による広告に登場するが、第一次大戦後にインフレで価値が暴落したドイツマルクの購入を勧めるものである。例えば、今日極端に暴落しているマルクが、幾年もしないうちに原価を回復するのは火をみるより明らかであり、現今アメリカ、イギリス、フランス、イタリアと中国・日本の、経済に通じている人や実業家、資本家や労働者は先を争って買い置きしている、今16～17円で1,000マルク買っておけば幾年もしないうちに500円の大きな利益を必ず得られる、というような宣伝を行なっている⁽²⁷⁾。非常に投機的であり、どれだけの人がこれを購入したか定かではないが、玉田洋行との連名広告では補聴器、ズボン機械なども取り上げられており、取扱商品が麗徳洋行よりも多方面にわたっていたことが分かる。なお、『東亜日報』には玉田洋行の広告も掲載されているが、ドイツ紙幣の案内（22/7/6, 22/7/21, 22/10/18）、ドイツ製医薬品、ズボン織機、空気銃、補聴器、安全カミソリなどの商品も宣伝されている（22/11/4, 22/11/27）。玉田洋行を通じて実にさまざまな商品を販売しようと試みていた様子が垣間見える。

ちなみに、次頁の表2は1921年から1922年にかけて『東亜日報』に掲載された、上海在住朝鮮人による会社・商店の広告回数と取扱商品を表に直したものである。ここからは、靴、洋服、ズボン、時計、眼鏡などの身の回り品が多く目立つ。麗徳洋行や倍達会社が外国の医薬品を扱い（もっとも、すでに触れたように麗徳洋行は後に絹織物や雑貨も扱うようになるが）、さらに倍達公司是玉田洋行を通じてであるが投機的性格が強いドイツ紙幣も扱うようなところに、他の会社・商店とは異なる特徴が浮き彫りとなる。

では、麗徳洋行や倍達会社の資本金はどれ位であったかという点、残念ながら直接的に指し示す史料がない。そのため、傍証的になるが表2でまとめた広告掲載回数を比較するという方法により、検討してみることにする。表2をみると麗徳洋行が最多であり、金文洋行が次に続き、3番目が倍達公司となっている。したがって、1921年と1922年を通じてこの3社の新聞広告が最も多かったことが分かる。いずれにせよ、麗徳洋行と倍達公

(27) 『東亜日報』 22/8/13, 22/8/20。

表 2. 『東亜日報』広告掲載の上海在住朝鮮人経営の会社・商店 (1921～1922年)

会社名, 店名	広告掲載回数	主な取扱商品	備考
麗徳洋行	73回	(表 1 を参照)	
倍達公司	27回	(表 1 を参照)	
金文洋行	28回	靴, 時計, 眼鏡	
徳順福洋靴店	24回	靴, 時計	
東新公司	18回	ズボン, 靴, 時計, 眼鏡	
麗信公司	16回	絹織物, 薬材, 染料その他雑貨, ロシア産物	7 回は朝鮮仁川府の麗信公司出張所との連名, 9回はソ連ウラジボストック新韓村に麗信公司支店設置の広告, および出張所, 同支店との連名。
海昌洋行	12回	唐版書籍, 時計, 眼鏡など	
大成公司	8 回	靴, 洋服, 時計, 眼鏡, 書籍, 絹織物, 薬材, 雑貨など	
大東貿易公司	7 回	朝鮮に業務機関設置の広告	
協盛洋靴店	7 回	靴	
万里号襪靴工廠	4 回	ズボン, 靴	
泰興洋靴店	4 回	靴	
金剛山号	3 回	紳士服, 外套	
富昌行	1 回	防寒衣類, 靴	
亜細亜公司	1 回	上海外套	徳順福洋靴店が名称を改めたもの (21/12/24)。

出典：『東亜日報』1921～1922年の広告欄より作成。

注：筆者が広告欄をもとに、表に編集し直した。

司はともに広告掲載回数が上位ランクだったのであり、上海在住朝鮮人経営の会社・商店の中でも資本力が比較的に大きかった方ではないかと考えられる。

ところで、『東亜日報』に上海在住朝鮮人の広告が掲載された点について考える場合、国境を超える情報の移動という点が重要な課題として浮かび上がってくる。李鍊氏は日本の朝鮮民族に対するプロパガンダという観点からであるが、交通手段の発達と言論の発達との関連性に着目している。そして李氏が紹介している春原昭彦氏の「新聞の発達に運輸通信手段の発達は不可欠なものである」という報告は、上海と朝鮮半島との交通と情報

との関係という点で参考になり得る指摘であるように思われる⁽²⁸⁾。朝鮮半島と上海の間の直行便は、1924年に朝鮮郵船株式会社により運航が開始されたが、それ以前は日本内地または華北經由であったため⁽²⁹⁾、1920年代半ばまでの交通は必ずしも便利という状況ではなかった。しかし、それは逆説的に捉えれば、不便ながらも往来があり、それとともに情報が移動する可能性もあったということを意味する。例えば『東亜日報』や、1920年に朝鮮半島で発行された総合雑誌『開闢』の代理販売部の担い手として、金時文という上海在住朝鮮人の名が韓国臨時政府の機関紙『独立新聞』にみえる⁽³⁰⁾。それを踏まえて考えると、本章で明らかにしたような新聞広告の件は、不便ながらも朝鮮半島と上海を国境を越えてつなぐ交通の存在をバックグラウンドとする、情報の相互移動の現われとして捉えることができるのではないだろうか。

3. 麗徳洋行、倍達公司の朝鮮半島における事業

①販売網の形成

麗徳洋行や倍達公司是朝鮮での事業を展開すべく、代理店を設置して販売網を形成していくようになる。麗徳洋行による代理店募集が最初に確認されるのは、1921年4月28日の『東亜日報』広告である。すなわち、「朝鮮およびロシアの各大都市で相当な信用と資金で現在営業している会社、または個人商店へ委託しようとしします。志願人士は相談されることを願います」と、漢業代理店の募集を掛けている。その結果、麗徳洋行薬材部名義で出された同年8月5日付広告において、代理店経理「平壤竹典里 金澄植、定州郡城内 方応模」として住所と姓名が掲載される。定州郡とは朝鮮北部に位置する平安北道の一地方である（図を参照）。もっとも、彼ら

(28) 李鍊『朝鮮言論統制史』194頁、および同書第5章第4節「交通通信政策と朝鮮の言論統制」を参照。

(29) 『朝鮮郵船株式会社二十五年史』151頁（『社史で見る日本経済史 植民地編』第2巻、ゆまに書房、2001年）。

(30) 『独立新聞』22/1/1（『上海独立新聞』韓国学資料院発行、2004年、影印版）。『開闢』は1920年に創刊され、天道教の財政的支援を受けていたが、1926年に発行禁止処分を受けた（前掲『朝鮮近代史』206頁）。

はこの時点ではドイツ製医薬品の代理店経理という立場だったが、10月18日以降は「唐代薬理店経理」という肩書きで掲載されていることから、4月28日付の広告で募集した漢薬代理店の役割も担っていた様子が窺える⁽³¹⁾。一方で、自社製品の発売所は早い時期から設置していた。5月20日付広告ではイギリス製医薬品発売所として京城南大門内の済生堂薬房が初めて登場する。この薬房は6月22日時点で特約発売所と明記されているため、麗徳洋行と関係をより一層深めたものと思われる。その後、11月5日付広告では慶尚南道金海郡城内の普生堂薬房も特約発売所として済生堂薬房と併記されている⁽³²⁾。以上のように、麗徳洋行は自社製品の販売網を（特約）発売所、代理店という形で築いていったことが分かる。

倍達公司の場合、1921年10月27日付広告に初めて経理処として「京城桂洞五十番地 李交倓」という住所と氏名が登場するが、翌年『東亜日報』に掲載された「上海倍達新聞」欄には総経理部として京城楽園洞に誕生した鉄東洋行の名前が登場する。同欄には総経理部を通じて注文する旨の依頼も記されていることから、代理店としてその役割を担った様子が分かる。しかし、1922年5月19日付の広告では、鉄東洋行は事故により倍達会社が経理部を取り消したという案内が小さく出ている⁽³³⁾。この「事故」とは何を指すのか不明だが、おそらく商売上のトラブルを指していると思われる。その代わりという意味合いもあるのか、同じ広告には朝鮮総代理店として京城府南大門に設置した玉田洋行の紹介がなされ、「本公司特派員玉有彬氏を派遣して…総代理店を設け、各種見本品を備え置き、そして各種貨物を積み置」いている、と宣伝されている。この社名は主任が田元鳳という人物であることから⁽³⁴⁾、彼と玉観彬もしくは玉有彬の姓を一文字ずつ取って付けられたものであろう。玉有彬は玉観彬と同一姓であることから、血縁者と思われる。いずれにしても、倍達会社が朝鮮半島において自社製品販売の足場を築いた流れが分かる。さらに1922年8月以降は朝鮮半島各地に玉田洋行の取次販売店が設置されていくようになる。それはいう

(31) 『東亜日報』21/4/28, 21/8/5, 21/10/28, 21/11/8, 21/12/29。

(32) 同上21/5/20, 21/6/22, 21/11/5。

(33) 同上21/10/27, 22/1/19, 22/1/25, 22/1/29, 22/2/6, 22/2/12, 22/2/19, 22/5/19。

(34) 同上22/5/19。

1920年代初頭の上海における朝鮮人「実業家」

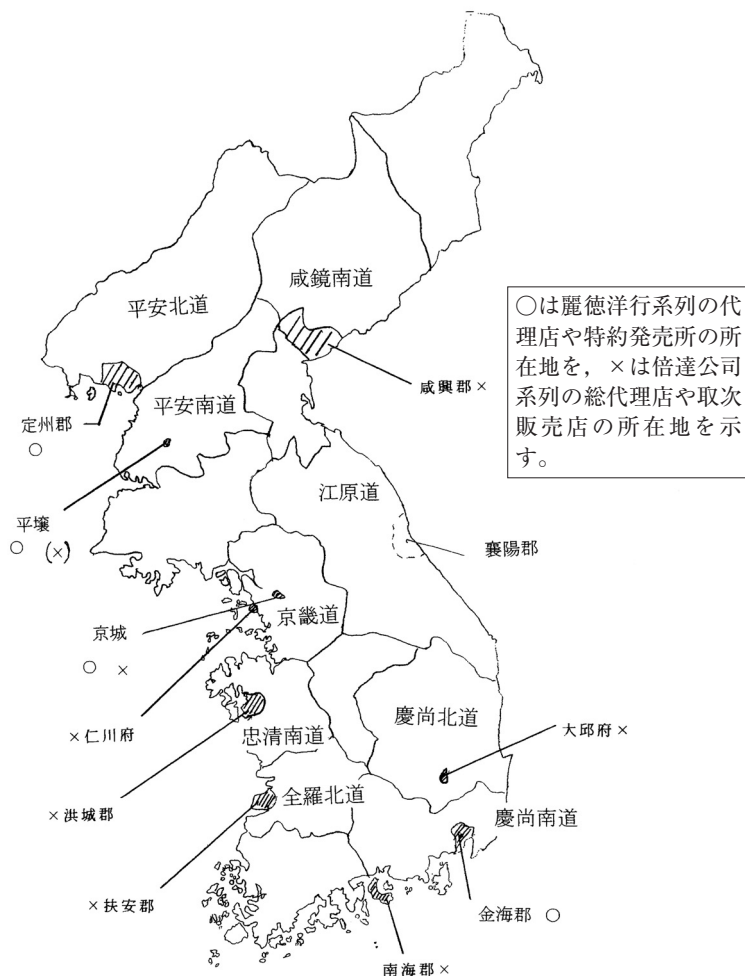


図 朝鮮半島地図

出典：『朝鮮の人口現象』付図（朝鮮総督府編、1927年）。

注①：出典をもとに、筆者が地図をトレースして作成したもの。

注②：地図では済州島や鬱陵島を省略してある。

までもなく、倍達公司の販売網が各地方にまでおよんだことを意味する。列挙すると次のようになる。仁川取次販売店（京畿道）：公民社，咸興取次販売店（咸鏡南道）：李昌林商会，南海郡（慶尚南道）：金贊一／南昌商店，扶安取次販売店（全羅北道）：金永己／扶新商店，洪城取次販売店（忠清南道）：金興善，大邱取次販売店（慶尚北道）：尹喆重⁽³⁵⁾。

図に示される記号は、以上述べてきた特約発売所や代理店，取次販売店などの所在地を示したものであり，○は麗徳洋行系列，×は倍達公司系列を表わす。ただし，倍達公司は平壤にも出張所を設置していたようだが，具体的に確認できないため（×）と表記した⁽³⁶⁾。これをみると，両社共通して朝鮮半島の中心都市・京城に設置したことが分かるが，大まかに捉えれば麗徳洋行が朝鮮半島北部を，倍達公司が中南部を中心としていた様子も浮かび上がってくる。

なお，倍達公司はベルリンの出張所に朝鮮人駐在員を置いていたことや，サンフランシスコに代理店を設置していたことも広告で明記されており，この点も考察すべきであるが，本論ではそこまでの余裕がないため，朝鮮に限定した次第である⁽³⁷⁾。

②上海日本総領事館の認識とそこから浮かび上がる点

取扱商品は多岐にわたるが，その販売方法は大体，送料代金分の切手30銭または50銭を先に送れば代金引換で需要に応じる方法と，前金を請求する方法であった。前者は医薬品の場合にみられ，後者は既述のように麗徳洋行による絹織物や雑貨の注文に対する規定にみることができる。玉田洋行は原則として価格の3分の1の金額を先に送金すれば代金引換に応じるといった方法だったが，ドイツマルクの場合，1,000マルク以上は時価の半額を先送すれば代金引換に応じ，1,000マルク以下は時価の全額を前金払いと規定であった⁽³⁸⁾。

(35) 『東亜日報』22/8/13，22/8/20，22/9/8，22/9/13。なお，22/8/13の広告には海南郡とあるが，南海郡の誤り。

(36) 同上22/5/1。

(37) 同上21/10/27，21/12/8など。

(38) 同上21/4/2，21/4/25，21/6/21，21/10/28，22/5/1，22/7/3など。

商品の価格については、量や時期によって異なる部分があるが、イギリス製医薬品は1瓶・半月分が1円50銭で、6瓶で8円となっている。ドイツ製医薬品は麗徳洋行、倍達公司ともに2円から3円前後が目立つが、量が多い場合や症状により価格が高くなっている商品もあり、例えば万応治咳丸は小瓶3円に対し大瓶6円、独逸洗淋薬は急性用3円に対し慢性用6円と設定されていた。また、独逸淋疾断根聖薬のように12円という高額のものもあった⁽³⁹⁾。どれだけの人が医薬品をはじめとする商品を購入したのかについては、詳細が不明なので安易なことは言えないが、東シナ海を隔てた朝鮮半島と上海との間でのこうした商取引では、金銭トラブルという問題も皆無だったわけではない。この点について日本官憲はどのような認識を示していたのかを、外務省記録を用いてみていくことにしたい。

1922年に船津辰一郎上海総領事より内田直哉外務大臣に宛てた報告では、独立運動家の生活難について述べた上で、

彼等ハ益生活難ニ陥リ遂ニ奸商的行為ヲ敢テ為スモノ近来頓ニ増加シ其手段トシテ何等当地ニ於テ店舗又ハ取引契約等為シ居ラサルニ何々洋行等ノ名ヲ附シ正々堂々ト新聞雑誌等ニ広告シ支那物産ノ安価ナルヲ誇大ニ吹聴シテ依頼者ヨリ前金ヲ要求スルニ係ラズ何等現物ヲ送付セサル…⁽⁴⁰⁾

と、詐欺的手段で金銭を騙し取る者が増加していることを指摘する。続けて「朝鮮内地ヨリ当領事館ヲ經由シテ当地仏租界（注：フランス租界）居住鮮人ニ対シ返金方ノ説諭願ヲ提出シ来タルモノ漸ク多キ状況ニ有之候彼等ノ多数ハ仏租界専管居留地ニ在住シ一定ノ住所サヘナキ者モアリ」⁽⁴¹⁾と、朝鮮から返金要求が出されるものの、住所不定の者が多いため回収困難であることを述べている。こうした「奸商」の例として玉成彬を挙げる。

(39) 『東亜日報』21/4/2, 21/6/13, 21/10/21, 21/11/8, 22/5/1, 22/7/11など。

(40) 公信第868号（1922年12月22日）「不逞鮮人ノ詐欺的広告ニ依ル金品騙取ニ関スル件」（外務省記録『不逞団関係雑件 朝鮮人ノ部 在上海地方』4）。

(41) 同上。

朝鮮江原道襄陽郡土城面金溶集ヨリ仏租界霞飛路二六〇号麗徳洋行事
玉成彬ハ右手段ノ下ニ七十円送金セシメ注文ノ夏布送付セサルヨリ返
金方願出アリタル外同人ニ対シ同一事件二、三アリ⁽⁴²⁾

とあるように、玉成彬が代金を先に支払わせたにも拘らず、商品を送付しなかったと述べている。また、この種の「奸商」として玉観彬も「^{<ママ>}培達公司 玉観彬」という形で記録されている。

この報告は、生活難に陥った独立運動家が詐欺的手段で金銭を騙し取っているという趣旨であるが、玉成彬については確かに1922年2月以降の詳細が不明であること、また既述のように、絹織物および雑貨の注文は必ず先金を要することなどを規定の1つとして挙げていることを以てすれば、「奸商」と見做すことも可能である。しかしながら、代理店や特約発売所を設置するとともにそれを何度も『東亜日報』紙上で公表しており、そこには信用が掛かっていた筈である。そのように断定できるのか慎重を要するところであろう。独立運動家の現状理解の一環として記録された官憲側の史料という性格にも注意する必要がある。

むしろ、この報告を通じて当時の朝鮮半島と上海の関係性が浮かび上がってくるということを指摘したい。玉成彬に対して訴えを起こした金溶集の居住地である江原道襄陽郡は、図から分かるように日本海に面した地域であり、海を隔てて中国に面する朝鮮半島西部の反対側に位置する。つまり、中国からはるか離れたこうした地域でも麗徳洋行と商売上のつながりがみられたことを表わしているわけである。すでに触れたように、朝鮮と上海は国境を越えて新聞広告という形で情報がつながっており、それをベースとして、経営者としての側面を有する独立運動家によって商品販売網が特約発売所や代理店設置という形で形成され、それにより国境を越えてモノやカネが往来するという商取引の可能性が、仮に細いパイプであったとしても築かれていたということを、この外務省記録は示しているのである。

(42) (40) に同じ。

おわりに

以上、1920年代初頭の上海において独立運動家として存在した玉成彬、玉観彬を事例的に取り上げ、具体的には1922年までを対象として、「実業家」としての側面を明らかにした。独立運動家が会社や商店を経営した背景として、生活のため、もしくは運動資金獲得のためという理由が可能性として考えられる旨冒頭で述べたが、経済的活動について真正面から取り上げられることは殆どなかった。

この時期、玉成彬や玉観彬は出身地であるとともに独立の対象である日本統治下の朝鮮半島で事業を展開しようとしていたわけであるが、その手段として『東亜日報』への広告掲載を定期的に行なうとともに、特約発売所や取次販売店、総代理店などを設置して販売網を形成していった。日本の当局は朝鮮半島から出された代金返還の訴えをもとに、玉成彬らを詐欺行為を働く「奸商」として捉えていたが、ここから浮かび上がるのは、繰り返しになるが新聞広告を通じて朝鮮半島・上海間は情報がつながっていたという点、そして国境を越えてモノやカネが往来するという商取引の可能性が、例え微々たるものであっても築かれていたということである。こうした点は上海という狭い範囲に限定してしまうとみえてこないものである。したがって、独立運動家を独立運動という政治的活動の観点からしか捉えるのではなく—もちろんそれを重視しつつも—、彼らの多様な活動を明らかにしていくとともに、それを上海のみに限定せず、朝鮮半島も含めたより広範囲な地域に位置付けて、捉え直していく作業も必要ではないだろうか。

本論で扱った内容は、史料が非常に限られているため十分明らかにできなかったり、傍証的にならざるを得ない部分が間々残った。なお、今回は取り上げなかったが、玉成彬や玉観彬に類似する他の独立運動家の考察や相互比較、そして独立運動に関わる関係上、経済的活動に何らかの思想的背景があるとすれば、それはどのようなものであったのかなどの解明も、今後の課題と位置付けられよう。

The Korean ‘Businessmen’ in Shanghai early 1920’s

~A case study about Ok-Song-Bing and Ok-Guan-Bing~

TAKEI Yoshikazu

This paper tries to elucidate the side of ‘Businessmen’ of Ok-Song-Bing and Ok-Guan-Bing, who joined Korean Independence Movement at Shanghai in early 1920’s.

They managed their companies, placed advertisements in ‘Dong-A-Illbo’ which was published in Korea, and set many dealerships in there. Through them, they tried to form the network of business.

It means that they opened the possibility of business cross the border between Korea where was under the rule of Japan and Shanghai, and it was based on the transfer of the information.

They used such surroundings, joining Korean Independence Movement, formed the side of ‘Businessmen’.

By researching these problems, we can find their various activities, and we have to research them place in the East Asia area.